

トマスィン・フォン・ツェルクレーレ (Thomasin von Zerclaere) の『イタリア人客 (Der wälsche Gast)』——中世の教育詩の一例

有信 真美菜

『イタリア人客 (Der wälsche Gast、以下 W.G. と表記)』は、おそらく13世紀前半に北イタリアのアクィレイア総大司教の宮廷で、そこで働いていたと考えられている聖堂参事会員トマスィン・フォン・ツェルクレーレ¹ (Thomasin von Zerclaere) という人物によって書かれたとされる中高ドイツ語²の教育詩である。教育詩 (didaktische Dichtung / Lehrgedicht) とは、現代で考えるような文学的な詩作ではなく、教育的・道徳的内容を詩の形式で書いたものである。同様のものとしては、12世紀末のヴェルンヘル・フォン・エルメンドルフによる、ギョーム・ド・コンシュの著作とされる『哲学者の道徳の教え (Moralium dogma philosophorum)』のドイツ語訳³や、W.G. としばしば比較される13世紀末のフーゴ・フォン・トリムベルクの『走者 (Der Renner)』があるが、どれも韻を踏んだ詩ではあるものの、内容も文体も「詩的」ではない。それなりの長さともって書かれた教育書の1つとしての W.G. は、同じ12、13世紀に書かれた教育書で、教科書的存在として相当広まった「有

1 Thomasin von Zerclaere の現在までの発音表記例: J. ブムケ、平尾浩三 (他) 訳『中世の騎士文化』白水社、1995 (J. Bumke, *Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*, München 1986) においては「トーマズィーン・フォン・ツィルクレーレ」、N. エリアス、赤井慧爾・中村元保・吉田正勝 (訳)『文明化の過程 (上) ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』法政大学出版局、1977 (N. Elias, *Über den Prozess der Zivilisation. Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*, Bd.1 *Wandlung des Verhaltens in den weltlichen Oberschichten des Abendlandes*, Bern 1969) においては「トーマシン・フォン・ツィルクラーリア」、尾野照治の論文では「トマスィン・フォン・ツィルクレーレ」。本稿ではこれらのどの表記も採用しなかった。本稿での表記を「トマスィン・フォン・ツェルクレーレ」としたのは、現段階でまだカタカナ表記が一定していないため、1) アルファベット表記はリュッケルト校訂を採用 (ただし i は長音にしない)、2) 発音は現代ドイツ語読みではなく、中高ドイツ語の発音を使用、という原則による。

2 中世高地ドイツ語 (Mittelhochdeutsch)。11世紀から14世紀頃の中世ドイツ語のこと。

3 この著作がギョーム・ド・コンシュの作かどうかは異論がある。またヴェルンヘルによるこの翻訳著作に題名はない。ギョームの著作自体も、書き出しの部分を題名として用いているだけであり、著作自体はキケロやセネカなどの古典古代の著作からの詞華集。

名な」著作がいくらかある中で、特に目立つ存在ではない。例えば、W.G. にも影響を与えたとされるギョーム・ド・コンシュの『哲学者の道徳の教え』は50以上の写本と印刷本が作られた。『走者』も約70冊の写本に加えて、16世紀に入ると印刷本として出版されたのに対して、W.G. は写本断片も含めて現在残っているものが30で、この時代のものとしては決して少なくはないが多くもない。加えて、思想的には際立って目新しいものもなく、後世の著作や思想に対する影響もほとんど知られていない。しかしながら、そのことでこの著作の研究対象としての価値を過小評価することはできない。W.G. は中世のこの時期に書かれるべくして書かれた「中世らしい」著作であると同時に、非常に興味深い特異な背景や性質を持ち合わせている。本稿ではW.G. の著作と著者の紹介をすると同時に、これらの点を指摘したい。⁴

まず著者トマスインに関しては、中世のこの時期の文芸作品ではよくあることだが、本人についての史料がほとんどない。この時期の詩人たちはしばしば自分の作品の中で自分自身について述べるため、このような場合は著者の「自己紹介」から情報を得ることとなる。W.G. における記述によると、この著作の著者はトマスイン・フォン・ツェルクレーレという名で (V. 75)、イタリアのフリウリで生まれたイタリア人で (V. 69, 71)、従ってドイツ語は彼の母語ではなかった。この作品を書いた時、彼はまだ30歳になっていなかった (V. 2445)。他の様々な記述から、トマスインは宮廷で何らかの仕事をしていて、その中で様々な政治的経験をしたと思われる。

この他の史料としては、アクィレイアの教会の過去帳に、死亡年の記載はないが聖堂参事会員だった「Tomasinus de Cerlara」という人物の記載があり、これがW.G. の著者トマスインと同一人物とされている。この当時、ある程度の大きさの道徳的教育的著作を書けるほどの教育を受けた教養人は大抵聖職者だったので、この解釈に問題はないだろう。これらのことから、現在までの研究で、トマスインは当時アクィレイアの総大司教だったヴォルフガー・フォン・エルラ (Wolfger von Erla) の宮廷で働いていた聖職者とされている。このヴォルフガーという人物は、有能な政治家として、また文芸の支援者の一人として非常に興味深い人物だが、残念ながらトマスインと彼の関係はよく分かっていない。W.G. においても、ヴォルフガーとトマスインの明確な関係を示す記述も献呈の辞もないからだ。しかしながら、明確な証言はないものの、トマスインがこの作品をヴォルフガーの宮廷で書いたと考えるのが妥当

4 以下、W.G. に関して述べるが、本文のテキストおよび行数については、H. Rückert (Hg.), *Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*, Berlin 1965 (Photomechanischer Nachdruck der 1852) に準じる。

である。1つには、ヴォルフガーが要職であるパッサウ司教とアキレニア総大司教を歴任したことに加えて、文芸のパトロンとしても知られていることである。例えば、パッサウ司教時代の旅行決算書における記述——歌人ヴァルター（ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ）に毛皮の上着を買うためのお金を与えたというもの——が、当時から有名だったにもかかわらず証書史料が1つしか残っていないこの詩人の唯一の史料である。⁵またヴォルフガーは学識法⁶の支援者でもあり、パッサウ司教時代にアイルハルト・フォン・ブレーメンによってヘクサメーターで書かれた法学のテキストがヴォルフガーに献呈されている。そのような人の宮廷で教育詩が、後述するが多少世俗的な要素も持ち合わせたものが書かれたとすることは、納得のいくことだろう。加えて、W.G. における同時代に関する言及の中に、有力者の下にいないればできないような政治経験に基づく記述があることから、トマスインがヴォルフガーの所にいたことが伺える。

W.G. はイタリア人聖堂参事会員によって、著者の母語ではない中高ドイツ語でわざわざ書かれたという点だけでも非常に興味深い。教養ある聖職者だったトマスインが著作を書く場合、この中世という時代から一般的に考えてラテン語を選択する方が自然だからだ。それにもかかわらずそうせずに、彼にとっては外国語であるドイツ語でこれだけの著作を書くことを選んだのである。これには、著者トマスインがいたアキレニアの状況が関係している。アキレニアでは、この地域がイタリアと接する神聖ローマ帝国の支配領域の前線地域という重要性から、総大司教自身が代々ドイツ人であり、従って宮廷にいた人々もドイツ人だった。つまり、トマスインの出身地フリウリを含むアキレニアでは、一般人はイタリア人でイタリア語圏だが、支配者階級の人々はドイツ人であり、政治的には神聖ローマ帝国の一部という二重構造だった。W.G. はフリウリ出身のトマスインによって書かれたが、ドイツ人へ、おそらく彼がいた宮廷の人々に向けてドイツ語で書かれたのである。

この著作の成立年代は、やはり著作の記述から1215年から16年にかけての10ヶ月間に書かれたと推定されている。2行ずつ韻を踏んだ詩の形式で書かれ、14000行を超える大作である。全体の構成は序文と10部⁷に分かれ、各部の長さは一定ではなく、

5 *Sequenti die apud Zei[zemurum] Walthero cantori de Vogelweide pro pellicio .v. sol. longos.* 次の日ツアイツェムルムでフォーゲルヴァイデの歌人ヴァルターに毛皮のための金貨5枚（を与えた）。（H. Heger, *Das Lebenszeugnis Walthers von der Vogelweide. Die Reiserechnungen des Passauer Bischofs Wolfger von Erla*, Wien 1970, S. 86.）

6 当時「両法（*ius utrumque*、ローマ法大全とカノン法大全の2つのこと）」と呼ばれていたものについての学問総体のこと。

7 写本によって *buoch*（書）と書かれたり *teil*（部）と書かれたりしている。校訂本では *teil*、また最

6～12章から成っている。写本によっては散文で書かれた前書き（作品全体の要約）がついている。この作品のタイトルは、著者自身によって著作の最後の方で「私の本はイタリア人客（der welhisch gast、イタリア出身のよそ者）という」⁸という形で述べられている。この「イタリア人客」というのは、トマスインの教育詩のタイトルであると同時に、著者自身のことでもある。尚、多くの写本の序文の部分に描かれる挿絵——使者（der bot）が擬人化された「ドイツ語（tiusche zunge）」に der walsch(e) gast と書かれた本を差し出している——においてもこの本のタイトルが示され、また最古の写本（cpg389）においては、序文の最初の行の上の所⁹にルブリク¹⁰で Der welhische gast と書かれている。

書かれている内容は、道徳的教育的著作として、全体を通じて人間が持つべき守るべき徳目を説いているが、かなりの長さであり、徳の教えと関連して様々なことが書かれている。以下、各部ごとに簡単に内容を紹介しておきたい。

前述の通り、多くの写本には、序文として散文で書かれた著者自身によると思われる W.G. の内容の各部ごとの要約がついている。この序文がないものもあるものも、第1部の前に韻文による序文から始まる。

序文では著者の自己紹介と、ドイツの人々に対してよそ者である自分を受け入れて欲しいと呼びかけている。

第1部は、宮廷社会に属する人々のためのマナーブックとなっている。

Ein juncvrouwe sol senftliclich und niht lût sprechen sicherlich.	若い婦人は穏やかに話すべきであって 声高に話すべきではない。
Ein juncherre sol sîn sô gereit daz er vernem swaz man im seit, sô daz ez undurft sî daz man im sage aver wî.	若い男性は 他人に言われたことを 理解できるようにしているべきだ、 他人が彼にもう一度言わなくていいように。
Zucht wert den vrouwen alln gemein	礼儀は婦人に

古の写本（cpg389、注 xix 参照）でも tail となっているので、ここでは teil の方を採用して「部」と訳した。

8 Min buoch heizt der welhisch gast (V. 14681)

9 この写本には散文による前書きがないため、この部分がこの本の一番最初の書き出しの部分となる。他の写本でもこの部分にルブリクがあるが、写本によって記述は異なる。

10 段落の冒頭などに主に用いられる朱書き文字のこと。

sitzen mit bein über bein.
Ein juncherr sol uf ein banc,
si si kurz ode lanc,
deheine wise stên niht,
ob er einn rîtr dâ sitzen siht.
Ein vrouwe sol ze deheiner zît
treten weder vast noch wît.
Wizzet daz ez ouch übel stêt,
rît ein rîtr da ein vrouwe gêt.

足を組んで座ることを禁じている。
若い男性はベンチの上に
それが長いものであれ短いものであれ
そこに一人の騎士が座っていたら、
同じように立ってはいけなない。
婦人はいつでもドシドシ歩いたり
大またで歩いたりすべきではない。
婦人が歩いている所で騎士が馬に乗って
いるというのは常に良くないことだと知
りなさい。¹¹

このような形で、男女別に持つべき美德と避けるべき悪徳、作法、そしてテーブルマナーについても述べられる。N. エリアスの『文明化の過程』では、W.G. は「ドイツ語による最も早い礼儀作法書」と言われている。¹² 特にテーブルマナーについて書かれた部分は、中世のテーブルマナーを集めた詞華集¹³に収録されている。更に、手本にすべき人の例として、宮廷叙事詩や騎士文学の登場人物の名が男女別に述べられていることも重要である。トマスインがこれらの物語についてどのようにして知ったのか、またここで名前を挙げられている人物の選定基準が不明——特に名前を挙げる必要のない人物がいる一方で、手本としてふさわしい人物の名が欠けている——という問題があるものの、この部分は聖職者による教育的著作としては非常に興味深い。大抵聖職者は道徳的な観点からこういった宮廷文学に対しては懐疑的で否定的であり、実際トマスインもこれらに対して懐疑的であるが、それにもかかわらずその教育的効果を評価し、手本とすべき人物としてここ以外でも度々パルツィヴァールやガーヴェインなどの名を出している。最後の部分で、男性がどのようにして貴婦人の愛を勝ち得るか、そしてそれに対して貴婦人はどう応じるべきかの宮廷的な恋愛作法が示される。

第2部では、人々の行動を決定する存在である領主に対する教えと、W.G. において中心的な徳である「安定 (stete)」とその反対の悪徳である「不安定 (unstete)」について述べられる。良い領主であろうとする人は、安定を守らなければならない。

11 V.405-420、筆者訳。

12 N. エリアス、赤井慧爾・中村元保・吉田正勝（訳）『文明化の過程（上）ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』法政大学出版局、1977、153頁

13 T.P. Thornton (Hg.), *Höfische Tischzuchten*, Berlin 1957.

ze schriben von herren und von knecht:
du tuost mir grôzez unreht.'

書かせた。
あなたは私に大いなる不正をした。」¹⁶

この先の部分で彼が宮廷にいることが述べられる。この部では主に正義について述べられ、第8部で書いたオットーに関する思い出をもう一度回顧し、その後聖俗の裁判が共によく機能しなければならず、そうしなかったばかりに異端が増えたとしている。聖界の裁判を行う人は俗界の裁判を行ってではなく、逆に俗界の裁判を行う人が聖界の裁判をも行うことはあってはならないとしている。

最後の第10部では「気前の良さ (milte)」という徳について述べられ、最後にこの本がどのような人に向けられて書かれたか、そしてこの本の題名が *der welhisch gast* ということが述べられる。

ごく大まかに内容を要約したが、この著作で書かれている内容のうち、全体を通じて扱われている徳の教え以外の特徴的な要素としては、(1)マナーブックとしての第1部、(2)序文、第1部、第5部などに見られる宮廷騎士文学の登場人物を用いた部分、(3)騎士への教え(第6部)、(4)主に第3部と第8部に見られる、当時の政治状況に関する記述(オットー4世、フリードリヒ2世、異端問題、十字軍など)、およびそれに関連して同時代の詩人ヴァルターに対する反応が挙げられる。全体として、教育書としてある程度の一貫性はあるものの、内容は相当多様なものとなっている。しかしながらこれは W.G. に特異な性質というわけではない。12、13世紀に書かれた教育書において、1つの本に様々なことが書かれて、そのために1冊の本がいくつかの性質を持ち合わせる事となったということは珍しくない。例えばソールズベリのヨハネスによる有名な『ポリクラティクス (*Policraticus sive de nugis curialium et vestigiis philosophorum*)』は君主鑑であり、政治学の本であり、当時様々な著作において書かれていた貴族社会や宮廷社会にある世俗文化やくだらない楽しみに対する批判の1つでもある。前述の通りしばしば W.G. と比較して扱われる『走者』も、道德の教えから様々な人々への批判が書かれているため、内容が雑多で一貫性に欠け、かつて中世後期から近世にかけて多量の写本が作られるほど好まれていたにもかかわらず、この性質故に後に文学史上軽視された時期があった。事実、『走者』よりもはるかに写本数の少ない W.G. の方が何故か100年以上早く校訂本が出版された。トマスンが影響を受けたとされるペトルス・アルフォンシの『聖職者の教え (*Disciplina*

16 V.12223-12238、筆者訳。

clericalis)』も、全体としては教育書であるが、その教育的内容を補強するために沢山の例話が挿入されているため、やはりこの時期よく書かれた逸話集の様相も呈している。当時は現代の人間が考えるような細かい文学ジャンルも、自分の作品がそのうちのどの分類に入るかなどということも考えてなかっただろうから、物語である宮廷叙事詩などは別として、これは当然の結果かもしれない。

前述の通り、中世のドイツ語で書かれたマナーブックとして第1部が重要であるが、その中でトマスィンが手本とすべき人物として当時12、13世紀に隆盛期を迎えた宮廷叙事詩の人物、特にアルトゥス王とその円卓の騎士を用いている点は重要である。既に序文の所で、トマスィンは「私にはガーヴェインの恩恵があるので、私は正当に私のケイイをあざ笑うべきだ。」¹⁷と述べている。第5部でもよき王の例としてのアルトゥス王、立派な人物としてパルツィヴァールなどを挙げているが、最も顕著なのは、第1部の途中で手本とすべき人物として、女性7人、男性10人、手本としてはいけない人物としてケイイ(カイ)¹⁸を挙げている部分である。¹⁹この部分が示しているのは、トマスィンが世俗的な宮廷叙事詩について知っていたということ、そして自分の教育書で聖人などではなく敢えてこのような宮廷叙事詩の登場人物を用いたことから著者自身に世俗宮廷文化への理解があったこと、そのことによって受容者である俗人への歩み寄りの姿勢があったということだけではない。この部分から、これらの人物および彼らが出てくる作品を受容者が知っていたことをトマスィンが期待できたということが考えられる。つまり、中世の宮廷叙事詩の受容に関する史料でもある。トマスィンが敢えて著作の言語にドイツ語を選ぶほど受容者のことを考えていた著者だったことから、そのように考えることができる。この著作全体で言及される宮廷叙事詩の人物全員について知っているためには、少なくとも7つ以上の作品を読むなり聞くなりして知っていなければならない。

騎士のあり方について第6部で述べていることも、これと関係があるだろう。勿論宮廷騎士文学や騎士文化への理解や、彼が宮廷にいて騎士達とも顔を合わせていたということばかりではなく、第8部で十字軍要請をしていることから、十字軍との関係もあって書いたのだろう。

この作品における同時代の出来事を書きとめた部分は、著者自身に当時の事につい

17 Hân ich Gâweins hulde wol, / von reht mîn Key spotten sol. (V.77-78)

18 ケイイ(カイ)はアルトゥス王の宮廷で高い役職についている騎士の一人であるが、その振る舞いや言動は軽率で乱暴でしばしば無作法なことをするため、良くない人物の例としてここでは用いられている。

19 V.1023-1079、パルツィヴァールを数えるとなると、男性は11人になる。

での「歴史記述」をしようというような意図があったわけではない。特にオットー 4 世の盾の模様についてなどはかなり長々と書いているが、どれもトマシンの徳の教えを補強するための例話や例証の役割を出ない。W.G. と同時代の著作では、出来事を現代の意味で言う歴史として記録する以外の目的で歴史記述が書かれることがしばしばあった。イングランドのヘンリー 2 世の宮廷にいたウォルター・マップの逸話集『宮廷人の閑話 (De nugis curialium)』やギラルドウス・カンブレンシスの君主鑑『君主の教化について (De principis instructione)』などにも相当量の同時代の歴史記述があるが、これらの記述はエンターテインメント性や例話としての用途に合わせるものが重要であり、記述内容の正確さは問題ではない。トマシンによる記述もこの延長線上にあるが、しかしながらトマシンがどのような政治経験をし、当時の状況をどのように見ていたかをこれらの記述から知ることができるだろう。彼がいたとされるアクィレイア総大司教の宮廷は、政治的に非常に重要な場所で、そこで勤務するということは、当時の神聖ローマ帝国を巡る重要な政治的事柄に関わることになる。アクィレイア総大司教は政治的には神聖ローマ帝国の聖界諸侯の一人であり、アクィレイアはドイツからイタリアへの交通の要所である。総大司教としては教皇の下にあり、地理的にも立場的にもドイツとイタリア、神聖ローマ帝国とローマ教皇の間に立つ役割を担うことになる。更にこの時期、アクィレイア自体のこのような状況とは別に、重要な政治上の出来事が続いている。ハインリヒ 6 世の早世から続いていたシュタウフェンのフィリップ・フォン・シュヴァーベンとヴェルフのオットー・フォン・ブラウンシュヴァイクの帝位争い、フィリップの殺害とおそらくトマシンがヴォルフガーと共に参加したと思われるオットーの戴冠、そして W.G. が書かれたとされる年代とほぼ同時の 1215 年の第 4 ラテラノ公会議とオットーの破門である。特にこの第 4 ラテラノ公会議前後の状況は W.G. にとっても重要である。資金不足から大変な失敗に終わったことで有名な第 4 回十字軍の教訓から対策がとられ、既に 1213 年から次の十字軍の資金集めのために教会に献金箱が置かれた。これに対してヴァルターが詩で攻撃していて、²⁰ 内容が一致することから、トマシンは直接ヴァルターの名を挙げてはいないが、²¹ ヴァルターに対して、特にこの詩に対して反論しているとされている。そしてそれに続いてドイツの騎士達に十字軍を期待している。この部分は、度々教皇を非難する詩を作ってきたヴァルターに対して、トマシンにインノケンティウス 3 世の政策を擁護する立場が見られるため、かつて D. ロシェはトマシンが

20 L.34,4, L.34,14

21 W.G. V.1191-11225 ヴァルターのことは「良き騎士 (der guote kneht)」と言っている。

W.G. を書いた動機を、インノケンティウス3世の2つの勅書の影響と、第4ラテラノ公会議と十字軍政策を擁護するためと考えた。²² 確かに第4ラテラノ公会議周辺の状況は W.G. の背景として重要だが、あくまでこういった記述はこの大作のほんの一部分にしか過ぎず、このことに W.G. 成立の直接の決定的な動因を求めることには無理がある。D. ロシェ自身も後にこの考えを若干修正している。²³ 13世紀にドイツではドイツ語で教育的著作が書かれるようになったという傾向や、既にこれまでに君主鑑などの様々な教育書が書かれ、トマスインが教養としてそれらを知っていたことなどを考えると、著作の動機は非常に複雑なものとなるだろう。

次に、この作品に関する現在までの研究を簡単にまとめておきたい。まず史料については、現在まで残っている写本のうち、完全写本の最も古いもの²⁴ は13世紀前半に成立したとされ、W.G. が書かれたのとはほぼ同期である。この他14世紀のものが5つ、そして15世紀のものが最も多く残っている。このことについて、写本断片に関しては14世紀のものが最も多く残っているの、15世紀に特別な事情で写本が特に作られたのか、あるいは偶然15世紀の写本が最も多く残ったのかは残念ながら分らない。最古の写本 (cpg389) については、ファクシミリが出版されている。²⁵ 校訂本の出版は比較的早く、1852年に H. リュッケルトによって出されている。²⁶ 新しいものとしては F.W.v. クリースによる校訂本があり、これは校訂本と写本の挿絵の研究など4巻からなっている。²⁷

内容に関する主な研究を挙げると、まず H. テスケによる包括的な研究²⁸ が、W.G. に関する古典的研究となっている。これは、著作と著者、それからこれらを取

22 D. Rocher, Thomasin von Zerclaere, Innocent III et Latran IV ou la véritable influence de l'actualité sur le Wälscher Gast, in: *Le Moyen Âge* 74 (No.1 1973) pp.35-55.

23 D. Rocher, Thomasin von Zerclaere. ein Dichter... oder ein Propagandist im Auftrag? in: E. Boshof, und F. P. Knapp (Hg.), *Wolfiger von Erla. Bischof von Passau (1191-1204) und Patriarch von Aquileja (1204-1218) als Kirchenfürst und Literaturmäzen*, Heidelberg 1994.

24 cpg389, ハイデルベルク大学図書館所蔵。羊皮紙の絵入り写本で、現存する W.G. の写本のうちこれが現段階では古い。

25 F. Neumann (Einführung in Thomasins Werk) und E. Vetter, *Der welsche Gast des Thomasin von Zerclaere. Codex Palatinus Germanicus 389 der Universitätsbibliothek Heidelberg*, Wiesbaden 1974.

26 H. Rückert (Hg.), *Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*.

27 F. W. von Kries (Hg.), *Thomasin von Zerclaere Der welsche Gast*, Bd.1 Einleitung, Überlieferung, Text, die Varianten des Prosa-vorworts, Göttingen 1984, Bd.2 Die Varianten der Hss. GFAD, der Būdinger und Sibiuer Fragmente Buch 1-10 (1984), Bd.3 Die Varianten der Redaktion S (1984), Bd.4 Die Illustrationen des Welschen Gasts: Kommentar mit Analyse der Bildinhalte und den Varianten der Schriftbandtexte. Verzeichnisse, Namenregister, Bibliographie (1985).

28 H. Teske, *Thomasin von Zerclaere. der Mann und sein Werk*, Heidelberg 1933.

り巻く環境——アクイレシアとヴォルフガーの宮廷、ヴォルフガー自身についてなど——を網羅的に扱っている。この他の大きな研究としては、アクイレシアの地域的な問題に注目した W. レッケの研究、そして E.J.F. ルフの博士論文や D. ロシェによる論文がある。²⁹ また近年、W.G. の挿絵の研究が出ている。³⁰ この他には特に D. ロシェの研究が、W.G. の歴史的周辺環境に比較的重点を置いている点で興味深い。³¹

この他の研究としては、W.G. の内容や思想に関するものが多い。主なものとしては、Ch. コルモーや Ch. フーバー、K.H. ゲッテルトなどが挙げられる。³² Ch. コルモーは特にギョーム・ド・コンシュの『哲学者の道徳の教え』を W.G. の「主要原典 (Hauptquelle)」とし、H. ゲッテルトもこの著作の影響を認めている他、マナーに関しては『ファケートウス (Facetus)』や『カトーの二行詩 (Disticha Catonis)』³³、テーブルマナーに関してはパトルス・アルフォンシの『聖職者の教え』など様々な著作の影響を受けているとしている。また愛の作法に関してはオヴィディウスやアンドレアス・カペラーヌスの『愛について (De amore)』の影響を受けていて、この他アラヌス・デ・インスリスの『自然の嘆き (De planctu naturae)』の影響も受けているとしている。古典古代の思想の影響については、『哲学者の道徳の教え』を通じてキケロの思想を恐らく知っていたということが推測され、徳の思想に関してはセネカやボエティウスの影響を考えている。Ch. フーバーの研究はアラヌス・デ・インスリスの中世ドイツ語作品への思想的影響に関するもので、アラヌスの思想の影響を受けた

29 W. Röcke, Feudale Anarchie und Landesherrschaft. Wirkungsmöglichkeiten didaktischer Literatur: Thomasin von Zerclaere «Der Wälsche Gast», Bern/ Frankfurt am Main/ Las Vegas 1978, E. J. F. Ruff, Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirklaria. Untersuchung zu Gehalt und Bedeutung einer mittelhochdeutschen Morallehre (Dissertation Erlangen 1982), D. Rocher, Thomasin von Zerclaere Der Wälsche Gast, Lille-Paris, 1977.

30 H. Wenzel und Ch. Lechtermann (Hg.), Beweglichkeit der Bilder. Text und Imagination in den illustrierten Handschriften des »welschen Gastes« von Thomasin von Zerclaere, Köln/ Weimar/ Wien 2002.

31 D. Rocher, Thomasin von Zerclaere, Innocent III et Latran IV ou la véritable influence de l'actualité sur le Wälscher Gast, in: Le Moyen Âge 74 (No.1 1973) pp.35-55, D. Rocher, Thomasin von Zerclaere. ein Dichter... oder ein Propagandist im Auftrag? in: E. Boshof, und F.P. Knapp (Hg.) Wolfger von Erla. Bischof von Passau (1191-1204) und Patriarch von Aquileja (1204-1218) als Kirchenfürst und Literaturmäzen, Heidelberg 1994.

32 Ch. Corneau, Tradierte Verhaltensnorm und Realitätserfahrung, in: Ch. Corneau (Hg.), Deutsche Literatur im Mittelalter. Kontakte und Perspektiven—Hugo Kuhn zum Gedenken, Stuttgart 1979, S.276-295, Ch. Huber, Die Aufnahme und Verarbeitung des Alanus ab Insulis in mittelhochdeutschen Dichtungen, München 1988, K.-H. Göttert Thomasin von Zerclaere und die Tradition der Moralistik, in: U. Ernst und B. Sowinski (Hg.), Kölner Germanistische Studien 30 Architectura Poetica. Festschrift für Johannes Rathofer zum 65. Geburtstag, Köln/ Wien 1990, S.179-188.

33 題名はこうなっているが、著者は古代ローマのカトーではなく、不明。著者は3、4世紀の人で、この作品は中世に広まった。

ものの1つとして W.G. を取り上げている。

日本の研究者で W.G. の研究をしているのは尾野照治だけだが、³⁴ ここではその研究の詳細に関しては割愛する。勿論 W.G. に関する研究はこれだけではなく、W.G. を用いた研究も多い。これは先に述べた W.G. の著作としての多様性のためである。

最後に、以上に述べてきたことを簡単にまとめておきたい。W.G. は著者や書かれた環境には、言語や地域の問題などいくつかの特異な点がある一方で、著作自体に関しては、古典古代や同時代の先人の思想の伝統を踏襲する傾向の強かった中世の著作らしく、特に斬新な思想もなく、『ポリクラティクス』や『走者』のように広まることもなかった。思想的著作としては必ずしも成功したとは言えないものの、そのことでこの作品全体を過小評価することはできない。W.G. の最も注目すべき点は、この作品が、その当時の時代と時期の状況や宮廷文化などの周辺環境に非常に即したものととなっていることである。トマスインが書いた徳の教えや批判が興味深いのは勿論のこと、更に彼は何らの意図もなく、大変重要な当時に関する証言を残している。それは文学の受容に関する証言であり、ヴァルターについての言及であり、あからさまな不快をもって書かれたオットー 4 世についての記述等である。加えてこの作品の成立そのものから、アキレアの言語状況や著者がいたとされるヴォルフガーの宮廷の性質を読み取ることができるだろう。前述の通り、史料として有用な記述の部分は、W.G. 全体の中では著者の徳の教えを補強するための例証に過ぎない。つまり、作品の主軸から外れた補助的な部分ではあるが、そこには一人の人物が当時の出来事を、何を見てどう思っていたかという記録が残されているのである。現在までは中高ドイツ語の詩作ということでドイツ文学の領域で扱われることが多かったが、今後は当時の政治や文化の史料として、今までとは異なった視点からの利用も可能だろう。

ありのぶ・まみな

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（比較文学比較文化）博士課程
研究テーマ：中世ヨーロッパの宮廷文化

34 尾野照治「中世ドイツの教育詩人トマジン・フォン・ツェルクレーレの『異国の客』に映し出された悪魔像」『ドイツ文学研究』45（2000年）1-23頁、同「13世紀のイタリア人司教座聖堂参事会員が論ずドイツ宮廷のミンネ観」『ドイツ文学研究』49（2004年）39-67頁、S. Ono, Konflikte und Verhaltenslehren im 'Wälschen Gast', in: Neue Beiträge zur Germanistik, Bd.1, S.166-179.